

人生における豊かさ（or 幸せ）とは何だろう？

荻野 聰

要 約

自分の人生を豊かに、あるいは幸せにしてくれるものは何か、考える活動を通じて、自己認識を深めた。また、他者の物事のとらえ方や価値観にふれることで、新たな気づきを得るとともに、ひるがえって自分自身の多様性に気付くことになり、自己認識を深めることにつながった。

キーワード：自己認識 豊かさ 幸せ 自己理解 他者理解

I はじめに

三年生の生徒は、一学期から二学期にかけて、自分自身の進路について考える機会が多くなってきている。昨年度までよりも明らかに学習面での意欲が高まっている生徒や、課題の提出率が見違えるよう改善された生徒もいる。日頃の学習に対する意識の高まりを評価したい一方で、そこにはどうしても「成績」の問題が関わってくるのは否めない。もちろん、自身の成績を向上させることを目標としてモチベーションを高められるのならば、それは歓迎すべきことと考える。

しかし、そこで教師の立場として少し立ち止まって考えたいのは、生徒たちがなぜ良い「成績」を求めるのか、ということである。自分自身の努力の成果によって自己承認欲求および社会承認欲求を充足するためというのも一因にはなっていよう。しかし、より現実的な問題として生徒に立ちはだかっているのは、より「良い進路」を得るために、ということではないだろうか。内申点、偏差値という数量的な評価基準は生徒の前に避けようのない現実として突きつけられる。そこで生徒に数字に無関心でいろといふのは無理な要求というものである。

ここで前述の問いに立ち戻るが、生徒はなぜ「良い進路」を求めるのか。そもそも進路に「良い」という形容詞を付ける場合、何をもって「良い」となり、何をもって「まずまず」となり、何をもって「今

ひとつ」となるのだろうか。もちろん、これらの見立ては流動的かつ相対的なものであり、生徒間によって個人差もあれば、同じ個人であっても時と場合と状況によっても変動するものだろう。その流動的な性質を前提として置きながらも、生徒が自分にとっての「良い進路」と判断する場合、そこにはどのような要素が絡んでくるものだろうか。おそらくそこには、ある程度の共通項として「伝統や校風」、「学校のネームバリュー」、「教育の質・内容」、「将来的な進路への接近」、「立地」……などが挙げられよう。生徒たちは三年生に進級してから、進路学習の一環として何度か、「自分が高校進学に求めるものは何か？」という問い合わせをされてきている。そこで自身と内的対話をしたり、家族や友達と対話したり、助言を受けたりしながら、進路に対するイメージを固めてきているのが現状である。

これらの実態をふまえて、本実践では、子ども達に「人生における豊かさとは何か？」を問い合わせていくこととする。「良い進路」を実現したいのはなぜか？それは「より良い人生・より豊かな人生を切り拓きたい」からではないか。すなわち、「豊かな人生」を生きることは、生徒たちが現在、努力と研鑽を積んでいくための内在的な目標になっているが、ではそもそも「人生における豊かさ」とは何なのか。生徒たちはその一点を突き詰めて考える機会がこれまでにあったのだろうか。建前として「豊かさ」を金銭的・経済的な裕福さと短絡的に結びつけ

て結論づけて語る生徒は少数と推察するが、しかし、金銭的な裕福さがあることによって人生を豊かに過ごす選択肢を増やしやすくなるのも事実である。金銭的な裕福さも当然挙がってしかるべきであろう。しかし、それのみで完結させて思考停止してしまう生徒に対しては教師から、あるいは生徒間で、「揺さぶり」をかけていきたい。金銭的な裕福さが「豊かさ」につながるのは、なぜか。そこには必ず、自分自身の価値観と照応した際に「豊か」であると判定する事物との交換が可能であるから、ということに気づいていくはずである。単なる金銭的裕福さは「豊かさ」と同義ではない、という点は単元の導入段階で生徒たちに考えさせていきたい。そこを出発点として「人生における豊かさ」とは何か、内的対話を通して考えることで自分の価値観に気づき、他者との交流を通じてさらに自分の価値観を再考していく契機とさせたい。

1 こどもの実態

自分の生活や生き方について立ち止まって振りかえったり、想像してみたりすることで、現在の自分自身のありようについて思いを巡らす機会したいと考え、本実践を計画した。中学三年で11月の末ともなれば、受験勉強に向けて余暇の楽しみを我慢することが増えてきたり、常に追い立てられるような生活を送ることで精神的なゆとりをもてなくなったりしてくる時期もある。そこで、「自分にとっての幸せ」や「人生を豊かにしてくれるもの」について考えることが、自分自身をありかえることや、これから生き方を考えることにつながると考えた。また、それぞれが考えていることを交流させる場面を設定することで、多様な背景をもって誰しもが生きていること、人によって価値観は異なり、自分にはないものをもっているのだということを意識するだろう。

2 本実践（題材・教材・材等）について

- ・単元名 人生における豊かさ（or 幸せ）とは何だろう？
- ・対象 3年A組、B組、C組、D組
- ・教材 「プロフェッショナル仕事の流儀」院内

学級教師 副島賢和の仕事」（2011年 NHK）

自分にとっての「人生を豊か（or 幸せ）にするもの」を付箋に書き出す活動を行う。自分にとっての「幸せ」とは何か、などと考えたことのない生徒も少なくないと予想されるため、書き出す足がかりが必要になるだろう。本単元では、生徒にとって身近である学年の教員からの回答を導入として示すこととした。予め交流場面の疑似体験をさせておくことで、本時での学習活動へのスムーズな移行と、交流の活性化を図りたい。

本実践ではさらに、自分との対話場面、級友との交流場面を経たあとで、生徒たちの価値観に「揺さぶり」をかけたいと考えている。そこで、視聴覚教材として「プロフェッショナル仕事の流儀」院内学級教師 副島賢和の仕事」（2011年 NHK）を視聴させることを計画している。VTR中、「もし私が大人になれたら詩人になりたい」という少女の言葉がある。また、院内学級に通う少年がかつて書いた「ぼくは幸せ」という題の詩が紹介される。

「ぼくは幸せ」
お家にいられれば幸せ
ごはんが食べられれば幸せ
空がきれいだと幸せ
みんなが
幸せと思わないことも
幸せに思えるから
ぼくのまわりには
幸せがいっぱいあるんだよ

将来のことを考えるにあたって「もし」という仮定を挟まなければならない少女のことや、ごく当たり前のことと感じられることを「幸せ」と表現する少年の言葉は、生徒にとって、自分達の日常に対する内省を促すことになるだろう。本時で「幸せ」について考えてきた枠組みが、あくまでも自分に見えていた範囲での枠組みだったことに気づくことが、これから共生社会を生き、切り拓いていくための素地を作ることに資すると考えている。ただし、授業者としては、視聴覚教材による「揺さぶり」が「自分達は恵まれている」、「今の日常を幸せと思わねばならない」というような画一的な価値判断を押しつけることにならないように極力留意したい。絶対的な「正解」を教え込むような教師の関わりや、生徒の現在の在り様を否定するようなことは、多様性の教育の観点からも本実践のねらいからも避けなければならないからである。

3 教科（道徳科）のねらい（平成29年告示学習指導要領一「内容項目の指導の観点より」一）

相互理解、寛容

→自分の考え方や意見を相手に伝えるとともに、それぞれの個性や立場を尊重し、いろいろなものを見方や考え方があることを理解し、寛容の心をもって謙虚に他に学び、自らを高めていくこと。

よりよく生きる喜び

→人間には自らの弱さや醜さを克服する強さや、気高く生きようとする心があることを理解し、人間として生きることに喜びを見いだすこと。

II 多様性の教育の観点からみた実践の構想

1 本実践における多様性の意味

- ・人生観や価値観の多様性
- ・環境・境遇の多様性
- ・物事のとらえ方の多様性
- ・自己理解の多様性

他者の考え方や価値観にふれ、その根拠や理由付けを理解することで、多様な考え方を理解することをねらいとする。「人生における豊かさ」には、個人差が大きく出ることが予想される。あるいは項目としては同じでも、その考え方の理由や根拠が異なることが予想される。自分の考え方や価値観にとらわれることなく、多様な考え方や価値観があることを前提として意識することで、他者に対する寛容さや、相手を尊重する態度を育むことにつなげたい。

また、自分や身近な友達の目から見た人生観の枠に留まらず、さまざまな環境に身を置く人がいることや、当たり前と感じていたことの価値にあらためて目を向けることで、自分自身を見つめ直すことを期待している。

2 本実践でめざす多様性に関する子どもの姿

- ・人生の豊かさを自分は「楽しさ」「安心」「挑戦」としていたけど、「悩み」や「壁」と一見するとマイナスに感じるような要素を挙げている人も

いたのに驚いた。

→他者の考え方ふれたことで、これまでにない認識や思考に共感できた例。

・毎日家に帰って学校に通うのが当たり前だと思っていたけど、副島先生の話から、病院に入院して病気と闘いながら勉強している子がいることを知った。今の自分の毎日をふりかえって、自分の生き方はどうなのか、考えさせられた。

→多様な環境や境遇を知ったことで、考え方や認識の幅が広がった例。

・幸せな人生って何だろうと考えてみた。現時点での考えは一応出せた。自分は意外と人生に「変化」を求めていることに気づいた。これからもっと自分自身の考え方も変わっていくかもしれない。

→自分自身を相対化することで自己理解を深めた例。

3 多様性を活かすための手立て

（1）付箋に書き出す

→現時点での、自身の生き方や価値観をふりかえり、自分の考え方の傾向を自覚することにつながる。

→はじめに付箋に書き出す際、「青→黄→赤」の順で、自分自身にとって重要そうなものを色分けして書くように指示する。色分けは厳密ではなく、インスピレーションに従って構わないこととする。次に、交流場面や映像資料の視聴を通じて新しいものをつけ足したくなったり、重み付けの色を変えたり書き直したりしたら、緑の付箋で書き足したり書き直したりすることができるようになる。そうすることで、一人で考えていた時点では思つかなかつた意見や、青や黄だったものが赤になつたり、赤だったものが、実はよく考えてみると青だったり、という生徒の思考の変容が視覚的に表れることになる。これらは、教師が生徒の変容を見とることにも活用できるし、同時に生徒自身が自分の変容に自覚的になることにもつなげられる。

（2）概念をゆさぶる

他の生徒との交流や、映像資料の視聴により、

- 自分と異なる考え方や異なる背景、価値観にふれさせることで、概念的なゆさぶりをかける。
- 各自の考えを付箋に書き出した後で、近くの席同士で一対一の交流を二度に分けて行う。1度目の交流は前後（男／男、女／女）、2度目の交流は横（男／女、男／女）で行う。
- 映像資料を視聴させ、何が「豊か or 幸せ」か、どこに「豊かさ or 幸せ」があるかということを、これまでと違う視点から考えるきっかけとする。

4 指導計画（全1時間）※資料1として添付

III 実践の実際

1 導入場面

本時の活動として、自分にとっての「幸せ」や「豊かさ」について考えていくことを伝える。ここで生徒に具体的なイメージをもたせるために「例えば、自分がどんな時に幸せだと感じるか、どんな人生を豊かな人生だと考えるか」ということで考えてもよいと、具体的な場面に置き換えた発問をした。そのまま考え始めさせることもできたが、導入として、学年担任教員から事前に聴き取った「最近幸せだと感じた瞬間」を紹介し、どの回答が誰のものかを予想を立てさせた。これは、活動のイメージをより具体的に共有させることと、生徒の興味関心を引き出すことが目的であった。

「息子とたわむれている時」という回答には、「〇〇先生だと思う。よく息子さんの話をしているから。」、「朝の星占いが一位だった時」という回答には、「ええ、そんな占い好きそうな先生いたっけ？」と、授業者の予想を上回る関心を見せた。他者にとっての「幸せ」について考えることが、他者への理解を一層深めることを理解している様子が多く見られた。しかし、本時では、人物当てクイズをすることが主眼ではなく、生徒一人ひとりの自己認識を深めさせることに重点を置いていたため、あまり引っ張ることはせず、展開1の活動へと移行した。

2 展開1の場面

ワークシートを配布し、「自分を幸せに、あるいは自分の人生を豊かにしてくれるものは何だろう？」と發問して活動をはじめた。予めワークシートには、「青、黄、赤」の三色の付箋を五枚ずつ貼りつけて配布している。三色の使い分けは自分の価値判断としてより重要だと思うものから「赤」、次を「黄」、その次を「青」として重み付けをし、グラデーションを付けることとした。

各色で多かった書き込みを以下に要約して示す。

赤の付箋

友達／仲間／経験／生きていること／家族／夢／趣味／睡眠／成長／音楽／ゲーム／経済的余裕／夢中になれるもの／自由／推し／学力／笑顔／時間／周囲からの評価／愛／食事／アニメ／読書／スマホ／仕事／風呂／家／ペット／人との交流／知見を得る時

黄の付箋

挑戦／成長／金銭的余裕／漫画／経済的な余裕／夢／趣味／ゲーム／アニメ／スポーツ／食事／友達／睡眠／ストレスからの解放／成績／部活動／自然／日常／休息／自分への評価／推し／周囲の人の幸せな表情／思い出／一人でいる時間・空間／音楽／信頼できる相手／笑い／程良い悩み／安定した生活／ペット／旅行／達成感／家／健康／スポーツ観戦／洋服／自分を理解してもらうこと／自立／刺激／歌うこと／ダンス／自分の部屋／人からの感謝／自由な時間／スマホ／安心感／学校／会話／夢／仲間／満足感／美味しい食事／感謝／家族／先輩・後輩／愛／周囲からの承認／知識

青の付箋

家族／ゲーム／睡眠／スポーツ／趣味／食事／娯楽／会話／運動／好きなことをしている時間／サッカー／スマホ／掃除／笑顔／買い物／経済的余裕／マンガ／パソコン／アニメ／一人の時間／夜景／人のつながり／風呂／友達／旅行／安心感／ジャンクフード／何もしなくていい時間／何か達成した時／出かけている時／読書／ペット／SNS／ファッショント／手料理／音楽／推し／東京／信頼・尊敬できる人／ピアノ／ゲームやスポーツで上手くいった時／プレゼント／健康／成績／合格／運命／知識／命／

思ひがけぬ幸運／何気ない日常／アイドル／推し／好きなグッズを手にいれる／快晴・良い天気／仕事／勉強／節約／成長／菓子／人間関係／風呂／読書／ストレスのない生活／お金を使うこと／自身／好きなアーティスト／布団／ほめられる／映画／車／You tube／達成感／夢／愛／ライバル／自分への満足・気づき

全体の傾向としては、「赤」の付箋への書き込みは、他者とのつながりを充足させるような内容、社会的承認欲求を満たすような内容が多く見られた。物質的・個別的なものよりは、より包括的な概念を多くの生徒が挙げていたことがわかった。逆に「青」の付箋への書き込みは、個別的、限定的であり、より個人的な内容の書き込みが多く見られた。

授業中、授業者は青の付箋に書き込む内容を「重要度が低いとは考えず、より身近な幸せとして考えて挙げてほしい」と投げかけた。それは、おそらく生徒の多くが「赤」には社会に通用する普遍性の高い内容を、「青」には個人的、個性的な直接体験を書いてくれることを期待してのはたらきかけだった。「赤」は他者との比較と共有において作用することが期待でき、「青」は個人作業として自己認識を深めていく場面で大いに作用するだろうと予想していた。授業中の生徒の姿は、教師が期待する以上に主体的、積極的なものであった。これまでの学校生活では、見てこなかった生徒の学校外での生活者として的一面が豊かに立ち上り、新鮮な発見が多くあり、生徒理解を深めることができた。

また、詳細は省略するが、交流場面では互いの付箋を紹介し合いながら

3 展開2の場面～学習感想～授業後の場面

「プロフェッショナル仕事の流儀 院内学級教師副島賢和の仕事」(2011年 NHK)を視聴し、院内学級に闘病しながら通う子どもたちがいることを、生徒たちは知った。院内学級の存在を知っているか問うたところ、各クラス1～2名が知っていたが、ほとんどの生徒にとっては初めて耳にする言葉であった。視聴した映像の内容や授業者の投げかけについては、I-2で先述したのでここでは省略する。

生徒にとって、映像を視聴したこと、これま

でに気付かなかった視点をもつことになり、改めて自己の認識を再構築する契機となったことが、学習感想から読み取ることができた。以下に数名の学習感想を引用する。

S1 (A組男子)

「おれ、音楽が好きで旅行が好きで家族が好きでバスケが好きで。めっちゃ幸せじやん。」とつぶやいている所にちょうど遭遇。授業者および隣の席の生徒と一緒に、「本当にリア充だよね。」と笑い合う。隣席の生徒は「私も旅行好きだよ。」と良いながら、S1のシートを見合う。授業者から、「本当に幸せそう。ところで、この付箋って、10年後、20年後、30年後も同じ付箋が出てくると思う？」と投げかけたところ、「うーん。多分、変わらないと思う。音楽もバスケも多分好きだろうし。でも、もしかするといづれは、家族のことがもっと大きくなっていくのかもしれない。」とつぶやいていた。

本時の感想として「人それぞれ幸せの価値観は違っている。～～～、一番良くないのは、他人と比べて優越感、劣等感を感じること。それをもつ人は一番かわいそうな人だと思う。」と記述していた。

S2 (A組女子)

赤の付箋で「推し」と書き、青の付箋で「推しの缶バッヂ、キーホルダー」と書き出した。「推し」とは、自分が最も応援しているアイドルやキャラクターのことを一言で言い表した概念である。生徒に付箋はどういう意図があって書き分けをしたのかたずねると、「グッズは手元に残るから大事ではあるけど、結局それは推しという存在があるから大事なのであって、推しそのものがいないと。」という答えが返ってきた。この生徒に限らず、他の生徒にも「推し」に類する文言は多く見られ、どれもただの趣味や嗜好の域を超えて、自分自身のアイデンティティに関わるような存在として記述する様子が見られた。一過性の熱というとらえ方もある一方で、単純な流行に惑わされているというだけでなく、「推し」を応援している自分自身、という、ある意味自分自身をメタ認知する側面も含めていることが生徒の発言や書き込みから受け取れた。文化的多様性に充ちる現代を生きる生徒たちの生々しい感性と在り様にふれた想いであった。

この生徒は本時の感想として「自分の人生を幸せに、豊かにしてくれるものを改めて考えてみると、自分がどんな人なのか見えてきた。近くの人と交流

してみると、みんないろんな考えがあるんだなと思った。同じ物でも重要度がちがつたり（原文ママ）、考えもしなかったようなことがあつたりしてとてもおもしろいと思った。」と記述した。普段、あまり自分の内面を掘り下げるような内容を言語化する生徒ではないが、本時において、級友との交流が刺激となり、自分自身を内省するきっかけとなつたことが推察される。

S3 (D組男子)

赤の付箋で、「知見を得るとき」というものがあった。S3は、根っからの読書好きで、部活動はオムニサイエンス部に所属している自称科学オタクである。よく自分の好きな本や、科学の実験のことなどを話してくれる生徒なので、授業者としては、どのような書き込みが見られるか注視したい生徒だった。授業後に授業者から「どうだった？」とS3に感想を求めた。すると、S3から「一番大きいのはこの『知見を得ること』だつていうのが分かりました。実験とか、本を読むのは好きだけど、やっぱり嬉しいのは、それらを通じて新しい知見を得る時だつて気づいたから。」という言葉があった。S3は、比較的、自分自身や自分の認めた領域のこと以外には、視野が狭くなる生徒である。それゆえ、他者との関わりも限定的であつたり、無自覚にシニカルな態度をとつてしまいがちだったりするところがある。本時では、緑の付箋として「星を見る」と「こだわり」の二枚が書かれたのみだった。授業者としては、他者との関わりから、さらに多様な観点にふれて変容してくれることを期待したが、その点ではもう一步深まりが足りなかつたと言える。ただ、S3にとって本時は、自分自身を振りかえり、自身の行動原理や動機付けの原点をメタ認知することにつながつたと考える。

さらに、本時の感想として「食事、睡眠に関するものが無かつた。基本的に知ることが好きみたいだ。ただ、興味が出たものに限定されている気がする。未来の自分も変わらずこれを好きでいてほしい。」と書いている。自分の興味関心の指向性や現状の把握をすると同時に、自身の将来に目を向けたことが分かる記述である。

S4 (A組女子)

授業者は本時で生徒たちに「概念的なゆさぶりをかける」ために映像資料を視聴させるという手立てを打つた。そうすることで、自分にとって「幸せ」とは何なのか、ということについて自問自答してほ

しいと考えたためである。また、そうすることで、人それぞれに価値観や背景が異なり、各自の想いや立場が尊重されることの大切さを生徒達が改めて考へてくれることを期待した。しかし、それと同時に授業者として心配したのは、院内学級に通う子ども達が言う「幸せ」を、「日常」として過ごす生徒たちに対して、半ば強制的に「原罪」を感じさせるような形に仕向けてしまうことである。授業の中で価値観を押しつけたいわけではなく、あくまでも一人ひとりが自分の考える幸せをもつていいのだということを大切に考えてほしいという説明は加えたものの、不安は残る形となつた。授業後の協議会の場でも参観者から指摘があり、視聴覚教材を用いなかつた場合、生徒の感想はどのようなものができるのか、どのような生徒の姿が現出するのかはまたの機会に検証したいところである。

S4は、本時の感想として次のように記述している。「幸せというのは人それぞれで、下を見ても上を見てもキリがないです。ですから、自分達が今回書いたたくさんの「幸せ」は、ビデオを見て「なんて大きい幸せなんだろう」と思いました。「幸せ」は比べるものではないと、分かっています。でもビデオの中の子供達の望む幸せは私達の日常です。だから自分は、自分なりの幸せを見つけても、色々と考えてしまうと思います。」

文章の中には、S4の中で生まれた葛藤と自己との対話の萌芽が透けて見えるようである。授業者が意図していた姿とは必ずしも一致しないものの、S4なりに熟考し、ためらいつつも想いをつづっている様子が伝わってくる。机間指導中に気づいていれば、ぜひ教室で共有させたかった感想である。他者との関係やつながりの中で自己を考える、という視野を獲得した姿だと考えられる。

S5 (D組男子) ※学級日誌の記述より)

S5はその日の学級日誌に「幸せなことを考えている人たちが幸せそうでした。」と記述した。本時の手立てである、付箋の活用と、交流場面の設定が、道徳科の観点から設定した「より良く生きるよろこび」のねらいにつながつたことが分かる記述である。S5は普段、周囲にはあまり目を向けることなく、自分の世界観を大切にして学校生活を送っている生徒である。授業中は、個人で考えて三色の付箋を書き出す場面では集中して取り組んでおり、対話場面では興味深そうに級友と語り合う姿が見られた。

S5は、授業日当日に日直として学級日誌を担当し

ていた。学級日誌には最後に一言を書き添える欄があり、日直がその日の感想や振り返りを自由記述する欄があるのだが、そこに書かれていたのが前述の一言である。一日の生活が終わった後で、このような感想が自然と出てきたことから、S5が本時の活動によって少なからぬ刺激を受けたことが分かる。

IV 考察

1 道徳科の観点から

○相互理解、寛容

(自分の考え方や意見を相手に伝えるとともに、それぞれの個性や立場を尊重し、いろいろなものを見方や考え方があることを理解し、寛容の心をもって謙虚に他に学び、自らを高めていくこと)

○よりよく生きる喜び

(人間には自らの弱さや醜さを克服する強さや気高く生きようとする心があることを理解し、人間として生きることに喜びを見いだすこと)

本実践では、生徒が自分自身の生活を振りかえって、さまざまな形で周囲には「幸せ」があり、自分の人生を豊かにしていることに気付く姿が見られた。他者との関わりによって豊かな人間関係を構築していくことや、自分自身の成長に気づき、社会的な承認欲求を満たしていくことは、より良く生きるよろこびへつながっていくことを認識している姿が見られた。本来であれば、教室内で生徒同士が意見を交流し合って、全体でその成果を共有していく場面を作りたかったが、感染予防の観点から断念せざるを得なかった。また、他者の考え方や価値観に肯定的にふれることで、相互理解が深まる様子も見られた。ただ、本実践では、自己認識の深めていくための一つの手立てとしての交流場面という意味合いが強かったことから、相互理解については、生徒への意識付けが弱かったことも授業記録から見てとることができた。授業者の反省点として挙げられる。

2 多様性の教育の観点から

○人生観や価値観の多様性

○環境・境遇の多様性

○物事のとらえ方の多様性

○自己理解の多様性

本実践は「多様性を活かす」観点で授業デザインをした。各々が自己理解を深めつつ、互いに交流す

る場面を設けることで、多様な価値観が存在すること、それぞれの生き方やその背景が異なることに気づき、その違いにふれることでひるがえって自己認識を深めることへつなげようとした。

本実践では、多様性の教育の観点を取り入れたことで、活動設定のねらいと見とりの観点を明瞭にすることができた。特に対話場面を設定することの意義を、多様な考え方によるふれさせることで自己を対象化して自己認識を深めさせる、という明確な設定をすることができたのは、授業者として価値が大きかった。

V 成果と課題

本実践は、「人生における豊かさ（or 幸せ）とは何だろう？」をテーマに授業を行った。受験期のただ中にある中学三年生にとって、とかく自己を振り返るゆとりをもつことが出来にくい時期である。また、他者との関わりをもつ機会が少なくなり、目に見える正解や数字の増減に一喜一憂するような日々を送る生徒も少なからずいる。授業者としては、生徒たちに一度立ち止まって、自分自身を見つめ直す機会をもってもらいたいという願いをもって、本実践を計画した。授業場面に限らず、生活上のさまざまな場面に波及できるような学びをこれからも実践的に追究していきたいと考えている。

引用・参考文献

- 1)『あかはなそえじ先生の ひとりじゃないよ』
(2015年 学研教育みらい 副島賢和)
- 2)「プロフェッショナル仕事の流儀 院内学級教師 副島賢和の仕事」(2011年 NHK)
- 3)「パッチ・アダムス トゥルー・ストーリー」(1998年)
- 4)「プレジデント Family (ファミリー) 2014年 10月号」(プレジデント社)

資料1

| 時 | ○学習活動 ・予想される子どもの反応 ●教師のはたらきかけ | ☆留意点 口評価 |
|------------|---|--|
| 導入 7分 | <p>○本時の見通しをもつ</p> <ul style="list-style-type: none"> ●「今日は、自分にとっての幸せとは何か、考えていきます。」 ●「例えば、自分がどんな時に幸せだと感じるのか、どんな人生を豊かだと感じるかということなどです。」 ●学校の先生達に幸せをどんな時に感じるかインタビューしてきました。それぞれ誰のものでしょうか。 ・○○先生らしいな。・これはわかる。共感できるな。 ・こういう身近なことも書いていいんだな。・○○先生の意外な一面に驚いた。 | <p>☆フェースシールドを持参させる。</p> <p>☆「自分が」という点を強調したい。社会的な常識や規範意識にとらわれすぎないようにさせたい。</p> <p>☆生徒の抵抗感を緩和するため、事前に数名の教員に依頼し、インタビューをしておく。</p> |
| 展開1 10分 | <p>「自分を幸せに、あるいは自分の人生を豊かにしてくれるもの」は何だろう？</p> | |
| 13分 | <p>○自分にとっての「自分を幸せに、あるいは自分の人生を豊かにしてくれるもの」を考えて、付箋に書き出す。（最大20）</p> <p>●付箋による色分け（青→黄→赤）の説明を行う。</p> <p>（例）「ともだち」、「家族」、「夢」、「安定した生活」、「趣味」、「笑顔」、「安心感」、「仲間」、「尊敬できる先輩」、「ストレスと無縁な生活」、「充実したセカンドライフ」、「教え子の活躍」、「周囲の人の温かさ」、「息子の成長」、「美味しい食事」、「金銭的余裕」、「温かな布団」、「愛犬たわむれる」、「自分自身の成長」、「周囲からのある程度の評価」、「穏やかな気候」、「ゆったりした時間」、「コーヒー」、「新しいデバイスが届く」、「テニス」、「ゲーム」、「漫画」、「健康」</p> <p>○近くの席と交流を行う。1度目の交流は前後（男／男、女／女）、2度目の交流は横（男／女、男／女）で貼り出した付箋について自由に交流しあう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「～～～」は自分と同じだけど、重要度が違うな。 ・「～～～」は気づかなかつたけど、確かにこれがあれば幸せかも。 ・この人は、物の豊かさより精神的な豊かさを大事にしているな ●ただ聞くだけではなく、交流しながら、考えが変わるものについては、緑の付箋を積極的に使うように声かけをする。 ●全体の様子を見ることはしながらも、対話を聞く方に意識をもつ。 ●タイマーをつけ、一度の交流は4分とする。 | <p>☆付箋を配布する。</p> <p>☆他の人には伝わらなくても自分がわかるように書けばよいことを伝える。</p> <p>☆三色の付箋で書き出すのは最大20個までとする。</p> <p>口付箋への書き出し</p> <p>☆あえて交流の仕方については指定しないが、対話が途切れたら貼られた付箋について質問しあうように予め指示しておく。</p> <p>☆交流を通じて新しく書き足したくなったり、色を変えたりしたものは、緑の付箋で書くようにさせる。重要度を変える場合は、上から重ねて貼り、何色に変えるか書いておく。</p> <p>☆交流の際、フェースシールドを着用して交流を行わせる。</p> |
| 展開2 12分 | <p>○映像資料（「プロフェッショナル仕事の流儀 院内学級教師 副島賢和の仕事」から <u>0:00~03:00</u>, <u>21:40~31:30</u>）を視聴する。</p> <p>●幸せは人それぞれ、環境によっても考え方によっても感じ方・捉え方が違うし、違っていて良いということを示す。</p> <p>・病気の子ども達を元氣にしている副島先生は、逆に子ども達から豊かなものを感じさせてもらっているはず。</p> | <p>☆視聴しながら、緑の付箋を書いていいって良いと伝える。</p> <p>☆決して映像資料の子ども達と比較して、「この子達と比べたら幸せだと思わねばならない」などというような思考をしないように伝える。</p> |
| まとめ 3分 | <p>○本時の感想を書く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・幸せって自分が思っていたよりもずっと広い考え方なのかもしれない。 ・自分の人生で何が大切なのか、少し考えが変わった。 ・自分が意外なものを大切に思っていたのが分かった。 | 口付箋、ワークシートの記述 |